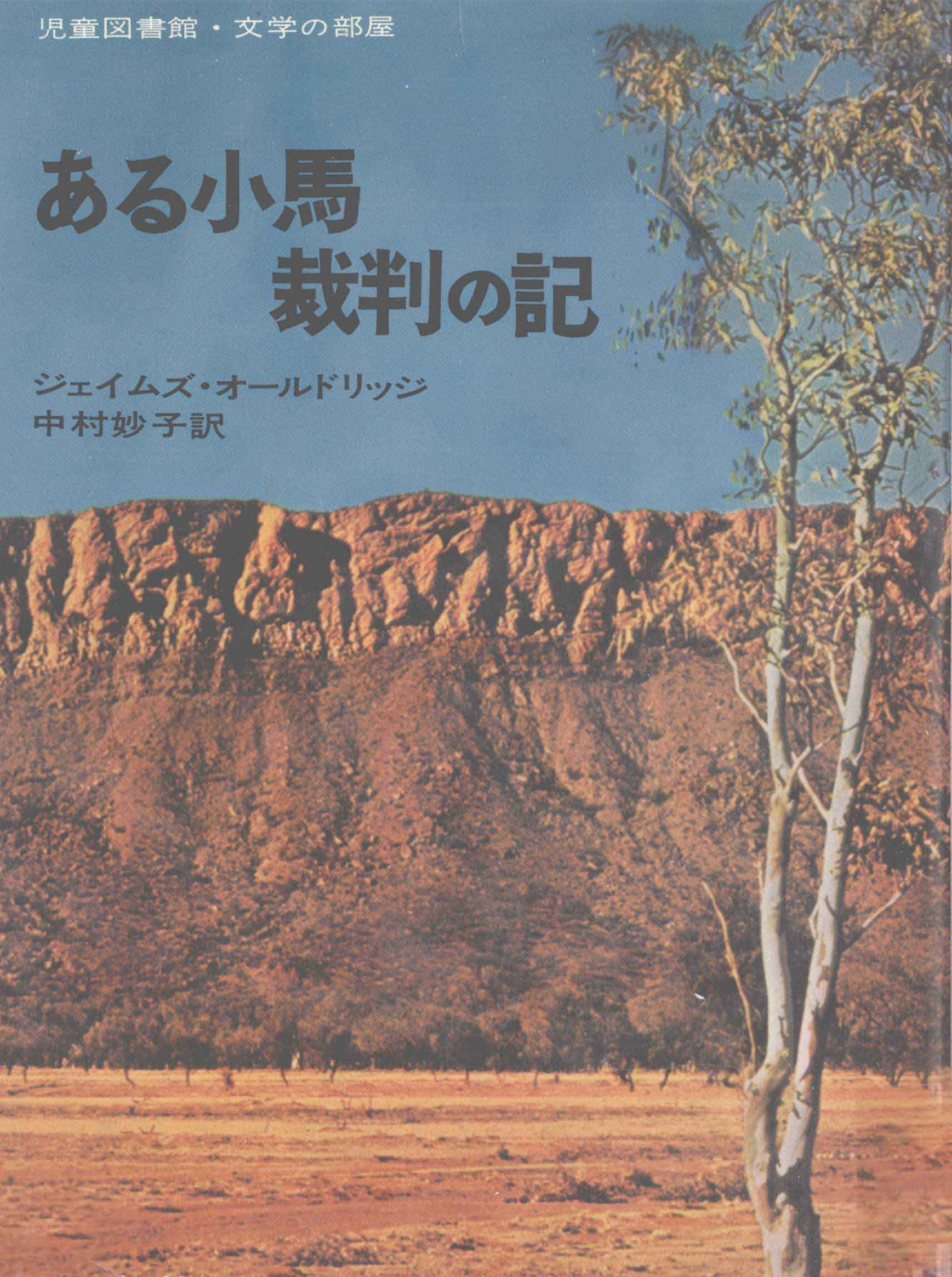


児童図書館・文学の部屋

ある小馬 裁判の記

ジェイムズ・オールドリッジ
中村妙子訳



商標登録番号 第 852070 号 登録許可済

児童図書館
文学の部屋

ある小馬裁判の記

昭和 51 年 9 月 30 日 初版発行

¥ 1,300

訳 者 中 村 妙 子

発 行 者 竹 下 晴 信

印刷所 三 倉 印 刷
製本所 株式会社 小林 製 本

発 行 所 株式 評 論 社
会 社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町 2-16

電話代表 (265) 1961

振替東京 8-7294

<検印省略>

落丁・乱丁本は本社にておとりかえいたします。

(A-1)

ある小馬裁判の記

シェイムズ・オールドリッジ作 中村妙子訳

A SPORTING PROPOSITION

by

James Aldridge

Original English language edition published
by Michael Joseph Ltd., London.

© 1973 by James Aldridge

Japanese translation rights arranged with
Curtis Brown Ltd., London through
Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo.

その夏、スコット・パイリーと彼の小馬がまに起こったことについて書くのはそう簡単ではない。なぜって、そもその発端はつたんからすべてが落着するまで、それはただ単にスコットと彼の小馬がまに起こった事件という以上の意味をもっていたからだ。じつさいのところ、それは結局、ぼくらの町そのものについての話とさえいえるくらいで、こうして一冊の本にまとめるにあたって、ぼくは、どうかするとんでもなく脇道にそれて、当時町で同時に演じられていたほかの人間ドラマについて書きたくなることかしばしばだったのだ。その年にはまったくいろいろな事件が起きた。まず町の人の操縦そうじゆうする飛行機が大川に掛けた橋の下をくぐろうとして墜落つらくした。次には叢林ブッシュの火事がひろがって、町の大切な富源である広い、なだらかな麦畑の近くまで迫った。事故による死者が年に四人出たのも珍しいことだった。一人は収獲時に、別な一人は列車の転轍てんてつ作業中に、残る二人は羊の群れを駅に連れて行く途中で。

しかしこうした出来事はスコティーとは何の関係もない。スコティーは彼の小馬がまのタフとともに、その夏、まさに町を二分してしまったのだ——彼に味方する者、敵対する者、彼を弁護べんごする者、攻撃こうげきする者、正しい考えかたをする者、間違った考えかたをする者、公正な態度をとる者、偏見へんけんにみちた態度をとる者等々、大

づかみにいって、二つの陣営に。彼がそのころやっと十三歳だったことを考えると、これはどうしてなかなか大したことだ。といつてもどの場合にも、彼がわざとそうしたわけではない。しかし、ぼくはいつも思うのだが、スコットに関する限り、その種（しゅ）のことが起こるのはむしろ避けがたいことではなかったか？ スコットという子には、懲罰（ちやうばつ）を受けたり、強情（かうじやう）をはったり、つぎつぎにいたずらをしたり、厄介（やっかい）ごとと巻きこまれたりする、特殊（とくしゆ）な才能（たのう）があつたようだ。また、彼になぜともなく好意（こうい）をもつ者がいる一方、ひどく毛嫌い（けきらひ）する者もいるというふうに、ひとりでに好悪（こうあく）の念（ねん）をひきだすような何かを生れながらに生（な）もつていたのだ。もつともスコティーについてそんな見かたをしたのは、おそらく、ぼく一人なのだろうが。

ぼくの住む、このオーストラリアの叢林（そうしん）地帯（ちたい）の町のほかの住民にとつては、スコティーはしょっちゅう咎（とが）めだてされるようなことばかりしかしてゐる平凡（へいぶん）な腕白（わんぱく）少年（せうねん）に過ぎなかった。しかし考えてみれば、それこそ、すべての出発点（しゅつぱん）なのかもしれない。ぼくらの町で織（お）りなされてゐた人間模様（にやうもやう）は、じつはことごとく町で営（い）まれてゐる生活（しやうか）の結果（けつが）だからだ。ぼくらの町は一方は叢林（そうしん）に、もう一方は十萬（じゅうまん）エーカーの麦畑（あひ）に接（つ）しており、川幅（かわはち）の広い、ぼくら子どもたちにとって、はなはだスリルに富（とみ）んだ川（が）が中央（ちやう）を流（なが）れてゐた。この川は冬（ふゆ）には満（み）々と水（みづ）をたたえる急流（きゅうりゅう）だが、夏（なつ）にはほとんど糸（いと）のように細（こ）い流れとなる。川（が）は本（ほん）当（とう）は二つあつて、町（まち）の上手（うへ）にずっと小（こ）ぶりの小川（が）があり、これが大川（が）に合流（がうりゅう）して、ぼくらがときどき、探検（たんけん）めいたことをやる島（しま）をそこに形（かたち）づくつてゐた。スコティーは二つの川（が）の隅（すみ）々（々）まで知（し）つてゐた。この二つの川（が）も、その夏の事件（じけん）に大きな役割（やくわく）を演（えん）じることになるのだが。事件（じけん）に関係（かんけい）があるといへば、大きな方の川（が）の向（む）う岸（がし）にある、羊（や）や牛（うし）、それに馬（うま）の大きな放牧場（はうぼくじやう）リヴァーサイドのことも書き洩（も）らすわけにはいかない。リヴァーサイドは当時（たうじ）ニュー・サウス・ウェールズ州（しゅう）指（さし）おりの牧場（ぼくじやう）として繁榮（はんえい）してゐたが、その所有者（しやうしゆ）エリソン・エアこそ、町（まち）を

分裂させたこの争いにおいて、スコティーと真正面から対立した当の相手だったのである。

ほくらの町にはいくつかの評判のりっぱな学校と、映画館と新聞社（ほくは後にそこで記者として働くことになるのだが）が一つずつ、六軒の酒場、自家用飛行機二機、その他競馬場、ゴルフ場などがあつた。大通りの両側には、こしょうもどきの並木がぼろ布を裂いたような葉を茂らせていた。町の住民の間には、じつにさまざまな勢力の暗流があり、それぞれ利害を異にする階層をなしていた。だからあらゆる意味でそれは、かつちりまとまった田舎町などという退屈きわまる代物ではけつしてなかつた。ここには金持もいれば、貧乏人もいた。教養のある人、ない人、金に糸目をつけぬ者、けちな者、愉快な人間、不愉快な人間、田舎者らしい、堅苦しい考えの者、都会的な、割りきつた考えかたをする者、乱暴者もいれば、臆病者もあり、新しがりも、昔気質の者もいた。また、そうした雑多な要素のいりまじつた町だつたからこそ、スコティーが突きつけた問題に関して真二つに割れたのだともいえるだろう。

スコティー自身については——彼こそ、まさにこの事件の初めであり終りであるのだが——いったい何から書いたらよいだろう？ 町の人々は彼を開拓地の少年と考えていた。彼が町から五マイル離れた、土に塩気のある小農場に両親と暮らしていたからである。スコティーのことを考えるとき、ぼくの頭にまっさきに浮ぶのは、ウェールズ種の小馬に鞍も置かず^{ポニ}に跨り、その背に貼りついたようにびったりくっついて町に現れる彼の姿、あるいは横町を飛ばすその後ろ姿であつた。町にやってくるときは大通りをがむしゃらに飛ばしてくるが、帰って行くときにはきまつて何やら訳ありげに裏通りを遠ざかつて行く。それこそ人馬一体となつてユーカーの木立の間を縫い、あつという間に姿を消しているのであつた。こそこそしているというのではないが、スコティーは景色の中に溶けこむのが好きで、しかもそれをすこぶる効果的にやつてのけた。ま

ったく彼ほど思いがけない時と所に不意に現われ、いつの間にかまた姿を消している者はいなかった。

スコティーに関する逸話の多くは取るに足らないもので、とくに記憶に残るほどではないが、一つ二つ後の事件のいわば土台となったものが頭に浮ぶ。たとえば、ベンハウとセント・ヘレンの間を毎日往復している列車の機関士J・T・クリミアンが、ある日スコットについて駅長にこぼしたことがある。小馬に乗ったスコティーが列車と競争するので危くて仕方がないと彼は訴えた。川は町にはいる少し前で大きく屈曲し、かなりの距離の間、川底の土が露出していた。鉄道はそこまで直進した後、川とともに、ぐっと方向を転換している。たまたま列車の通過時刻にこちら側の岸にいと、スコティーは列車が屈曲部を曲るべく速度を落すその瞬間を選んで競走をはじめたのであった。この屈曲部の地面は乾いてはいても、ことのほかでこぼこで危険きわまりないのだが、スコティーとタフはまったく一体となってそこを疾駆した。流れのうがった穴や兎穴、イラクサの茂みなども、走る小馬には本場の意味では障害とならなかった。ただ問題は、線路と川の屈曲部の境にある高い有刺鉄線の垣根であった。

小馬の背に身を伏せて、古いA3型の機関車と肩を並べて走るスコティーとしては、列車の前を飛ぶように横切って線路を越えるか、有刺鉄線の垣根にぶつかるか、それとも二十フィート下の川の中に飛びこむしかなかった。いつもだと彼は、列車の鼻先をすれすれに掠めて線路を横切るのだが、そのつど機関士のJ・T・クリミアンと機関助手のアンディー・アンダーソンはびっしり冷汗をかいた。ほんの数インチの差で、あやうくスコティーをはねとばしそうになることも何度かあったのだから。けれども彼らが駅長にスコティーのことを訴えた日には、列車は不断とは違い、時速二十マイルでなく、二十五マイルで走っていた。だからタフが線路を無事に横断できないことは、きわめてはっきりしていたのである。

J・Tは機関車の窓から身を乗りだして、油じみたリント布をスコティーに向かって振り、怒った声でどなった。「とても横切れるものじゃないよ、スコティー、おれは今日は急いでいるんだから」

スコティーは小馬の足掻きをいつそう速めた。頭を押しさげ、肘の緊張をちよつとゆるめるだけで、小馬は乗り手の気持を呑みこんだ。けれどもタフが耳を寝かせ、たてがみをひらめかし、背をぐつと低めて疾駆していたとはいえ、列車が通過するまえに線路を横切る間がないということはわかりきっていた。

「制動機を掛けろ！」とアンディーがJ・Tに向かってわめいた。

「もう遅い。ついそこが曲り角だ」

A3型機関車が屈曲部にさしかかったとき、タフは有刺鉄線の垣根か、川か、どっちかに向かってやみくもに突進していた。

「垣根にぶつかっちまうぞ」

「いいや、川にさんぶりだろう」

しかし事は、もう少しこみいつていたのである。

タフは蹄を乾いた泥の中に突き立ててだしぬけに止った。一方、小馬の背中中のスコティーは弾みを食らって、その頭上を越し、二十フィート下の川中に大きな水音とともに飛びこんでいたのであった。

J・Tとアンディーが身をのけぞらせて窓から覗くと、スコティーが水面に浮びあがるところだった。二人は彼が川岸の方へと泳いで行くのを見送ったが、間もなくその姿は見えなくなった。二人の男はこの出来事にすっかり胆をつぶしてしまったので、事をそのまま見送ることができなかった。彼らから報告を受けた駅長が警察に通報し、巡査部長のジョー・コリンズがスコティーの通っている学校を訪ねて校長に面会し

らず」と彼に告げる町の声に対して、相手かまわず挑戦していたのだ。町全体を四六時中相手に回していたというのではないが、その一定の部分に、かなりしばしば敵対していたことは事実であった。しかもそれは明らかに、彼の貧しさと、また彼が両親とともに余儀なく送っているみじめな生活と関係があったのだ。

スコティの両親は、少なくとも一つの点で彼によく似ていた。二人とも彼と同じく自己防衛の垣根を自分のまわりに張りめぐらしており、そのため、他人はなかなか彼らと接触できなかった。けれども、ひとたびそうした垣根を乗り越えれば、彼らがどうしてそんな態度をとるのか、しだいにわかってきた。アンガス・パイリーとその妻（何という名か、ぼくらはついぞ知らなかった）は一九二〇年代の初めに、グラスゴーのとびきりひどい貧民窟からセント・ヘレンに移住してきた。二人とも少年少女時代を、植物の生え育つさまはもちろん、草も木も土も、澄みきった青い空の一片さえ見たことのない、工業都市クライドバンクの薄汚い片隅で過ごしたらしい。彼らは、イギリス本国における貧困をオーストラリアのそれと取換えるべくこの地に向かう移民を援護する団体の一つによって、オーストラリア行きの船に（文字通り）積みこまれた。それは愛隣運動という名のもとに、渡航費用のない移民を送り出す機関だった。問題は、オーストラリアがそれら移民に提供できるほとんど唯一の仕事が農業だということであった。イングリランドやスコットランド、またウェールズから直輸入された「貧しき隣人」たちは農業のいろはも知らないまま、オーストラリアの農地に送られた。しかもその農地たるやしばしば、猫一匹養えないほど不毛の痩せた土地だったのだ。

こうした片手落ちな移民計画にしたがってアンガス・パイリーとその妻は、ぼくらの町のマイル外にある低地に入植した。それはまさに彼らのように貧しい、無知な移民を収容すべく、愛隣運動に売りつけられた区劃の一つであった。土地は、夏には鉄のようにこちこちに干あがり、冬になればなるで、ぬかるんで塩

氣を生じ、おりおりは沼のように水浸しにさえなつて、ほとんど農地の用をなさなかった。作物を植えること、育てることについて何の知識もない、いや、日光とか、風、砂嵐、洪水について何一つ知らず、牛にいても、馬についても——つまり、およそ何についても無知な男にとっては、それは子どもが、見たこともない、こみいった飛行機を飛ばすことを強いられたようなものであった。

しかしこの空き腹をかかえた、小男のスコットランド人は曲りなりにも飛行機を飛ばした。手足の細い、目の薄青い、どこか淋しげな小柄な妻とともに、何とか生きのびていった。どうして生きていけたのか、町の者は誰一人知らなかったのだが。誰もがパイリー夫婦を氣の毒に思っていた。彼らはけつして同情を求めず、また、面と向かつて同情を示す人間を赦さなかった。けれども彼らはいつも、「あの氣の毒なパイリー一家」と呼ばれていた。年月がめぐるにつれてアングス・パイリーはますます小さく縮み、いつそ頑固に、陰氣に、瘦せ細っていった。四頭の乳牛の乳をしぼり、塩氣のある土地からムラサキウマゴヤシを得ようとして、ぬかるみや、塩害、悪天候と悪戦苦闘するうちに、いよいよ無口となり、町の人々といつそう疎遠になった。

ぼくの母から聞いたところによると、スコットが生まれて数カ月後まで、町の者は誰もパイリー夫婦に赤ん坊が生まれたことを知らなかったそうだ。そのときアングスは、生後二カ月以内に子どもの出生の届出をする義務を怠ったとかで告発されたのである。ぼくの父は町の法廷弁護士兼事務弁護士（オーストラリアでは一人でこの二つを兼ねることになっている）として、法律上の細則をいたてて彼を放免してもらった。この細則によると、辺鄙な土地では情状酌量の余地のある場合に限って届出期限の延長が認められている。自意識のいちじるしく強いこのオーストラリアの町においてイギリス人弁護士のぼくの父は、無口

で孤独なスコットランド人アンガスの生活に、そうした情状酌量の余地を大に見出した。とくにその季節、息子の出生を届けるために一日農場をあげるなんて、アンガスにとっては問題外だったろう。父は治安裁判所に憤然と抗議し、誰か悪辣なオーストラリア人がアンガスに押しつけた、そのろくでもない土地で、彼が朝の四時から晩の十時までいかに暇なしに働いているかを語った。そして、もしも情状酌量が認められないならば、そもそも、なぜそんなひどい土地がパイリーに割り当てられたかを糾明することにしたといった。判事自身、以前は弁護士で、土地の投機をてがけたことのある男だったので、極力父をなだめて、アンガス・パイリーに対する告発を即座に却下したのであった。

この裁判沙汰によって、スコットの誕生ははじめて人々の知るところとなった。しかし彼が四つの夏まで、町の人は誰一人スコティーを見たことがなかった。その明るい夏の日、パイリーのおかみさんは夫と息子とはじめて三人連れだつてセント・ヘレンに姿を現わした。三人とも五マイルの道のりを（農場から道路まで一マイル、それから町まで四マイル）歩き通してきたのである。

なぜ三人が町にやってきたのか、町の人々にはわからずじまいだった。何かの祝いのつもりだったのだろうと後からぼくらは考えた。パイリー自身は穀物飼料店やバター工場で用を足すために、ときおり一人で町に現われたが、おかみさんがくることはめつたになかった。土曜日はこのあたりの市日で、町は農夫のトラックや馬車、乗用車でごったがえし、近くの村からやってきた者もまじえて、男女の若者たちが大通りをぞろぞろ歩いていた。商店も九時まで店をあけている習いだった。アンガスはどこかで自分の用事を足すために、やがて妻と息子を残して消えた。パイリーのおかみさんはスコティーと手をつないで通りのウインドーを一つずつ覗きながら歩いた。バラゴン・レストランのウインドーまで覗きこんだ。大通りを端から端まで

歩くと、二人は歩道のこし^ベようもどきの木の下^ッのベンチの一つに坐つて待った。

何を待っていたのか？

町の人々が挨拶^{あいさつ}するのをか？ それとも隣人たちに話しかけようとしてか？ パイリーのおかみさんはセント・ヘレンの人間を一人も知らなかった。近所づきあいといつても、市場に出す野菜を作っている中国人を数人知っているだけだった。手足の細い、スコットランド人らしい、薄青い目をした、どこか都会育ちのようなひ弱な感じの彼女は、ただそこにひっそり坐っていた。そしてまるで湖と谷と煙^{すず}と煤^{すす}の^{きり}霧の中に落ちこんでいく、スコットランドの黒ずんだ石畳^{いしだたみ}の街路を思いだしてでもいるように、じつと前方を凝視^{ぎょうし}していた。

しかしスコティーは影の薄い母親とは違つて、たちまち人々の注意をひきつけた。彼は黒い目の瘦^やせた父親にも、そばかすのある、色艶^{いろつや}の悪い顔の、何となく影の薄い母親にも似ていなかった。母親にはいつもほんやり遠くを見つめているような、どことなく子どもも子どもした感じがあつた。スコティーもじつは両親の血を濃く受けていたのかもしれないが、そのためかえて二人のどちらともかけ隔^{へだ}たつていた。びかびか光る、挑^{いど}むような、油断^{ゆだん}のない青い目、少々尖^{とが}つたピンク色の耳の間にもしやもしや突つ立っている赤毛——彼はいつも自分の目の前に立っている人間が味方か、敵か、判断しようとするように、黙^{もく}つて様子を窺^{うかが}つていた。味方とはどういうことか、説明するのは少々むずかしい。とにかくスコティーはたえず暗黙^{あんもく}のうちに人々を分類していた。まだたつた四歳の子どもではあつたが、その日すでに彼はベンチに腰をおろしたまま、無言のうちに町を二つに分けていたのだつた。

ぼくの母もそのときパイリー親子の姿を見た一人だったが、スコティーからどんな印象を受けたかとはよく

が後に聞いたとき、母はいった。「まったくあんなふうに見まぐるしくベンチの下にもぐったり出てきたりする子って、見たことがなかったわ——それこそ飽きもせずね」

母から聞いたところによると、そのころのスコティーは、よく日に焼けた、ずんぐりした体格の子だった。細いながらに筋肉の発達した足はいつもまったくの跣で、母親の手製らしい黒いビロードの半ズボンをはいていた。不斷着にちゃらちゃらしたビロードのズボンとは！ たぶんどこかの奥さんの着古したドレスをバイリーのおかみさんがもらい受けて、息子のズボンに作り直したに違いない。このズボン以上に、スコティーの置かれていた状況をまざまざと物語るものを、ぼくは知らない。それから三年後にも、このズボンはつぎを当てられ、裾をいくぶんおろされて、依然として着用に堪えていた。このころにはスコティーは、ズボンのことで彼をからかう者に誰彼構わず、飛びかかっていったものだ。

「でも、あの子がお母さんを保護しているんだってことは、いつもはつきりわかったわ」とぼくの母は、そのつむじ風のように目まぐるしい、青い目の少年に最初に会ったときのことを思いだしながら付け加えた。「あのお母さんは守ってあげる必要のある人だったからね。あの子ったら、自分のお母さんの傍には誰も坐らせず、触らせまいって気だったんでしょよ。強情そうな小さな顔と固めた拳に、大きな字で書いてあるようだったわ。『触るな！』って」

それは母親同士の同情から生まれた感傷だったのかもしれない。けれどもスコティーの小さいながらに、がっちりした体は彼のことにちよっかいを出したり、ばかにしたりする者、父親のことを嘲る者がいて、いつでも飛びかかった。青ざめた顔の忍耐強い母親が笑いにされると黙っていなかった。

しかも彼は、きわめてしばしば戦わなければならなかったのだ。彼の父は町の青年たち（ときにはいい年

をした大人も）が好んでからかうたぐいの男であった。土曜日に一人で町へやってくるとき、アンガスはときおりホワイト・スワン・ホテルの酒場の真鍮のカウンターの上に四シリングを投げだし、この分だけビールを飲ませてくれといった。渡されたコップからちびちび飲み、やがてよろめく足を踏みしめて彼が立ちあがると、町の悪童どもは千鳥足で五マイルの道を帰って行くそのあとをつけて、何やかやとからかったり、その歩きぶりをまねた。はては、意味のわからぬスコットランド訛でぶつぶつと呟いている彼の口調をまねて、互いにばかなことをいいあつたりした。彼らが図に乗ってアンガスの靴紐をほどこうとしても、アンガスは自分が笑い者になっていることも知らぬ様子で、よろよろと帰って行くのであった。

物心づいて、そうしたことの意味がわかるようになって、スコティーにできることはただ、情なさそうな顔で父親に付き添って歩き、悪童連が父親を嘲弄するのをじっと見ていることだけだった。しかし彼らがあまり近くに寄ると、たとえ相手が二倍の背丈、二倍の年齢でも死物狂いがかかっていった。だが、たいていの場合、スコティーの青い目は、「今に見ていろ」といつていた。また強情そうな小さな口もととは、すべてを心にたたむように引締められていた。一度サウスビーといういたずら者の兄弟が（彼ら自身一杯機嫌だったのだが）、バイリーのおかみさんがかぶっているものによく似た古い麦藁帽子をどこかで手にいれて、アンガス夫婦がよたよたと連れだつて町にやってくるのをまねて練り歩いたことがあった。このときスコティーはものもいわずに、土くれや、石や、馬糞を手当り次第に二人に投げつけ、それから七歳の小さな体を丸め、手近にいた方の若者に飛びかかり、拳で乱打し、蹴りつけた。さいわいサウスビー兄弟は根っから悪意があつてそんなことをしたわけではなかったので（オーストラリア人らしく人まねが好きで、誰かからかう機会があればけつして見送らなかつたまでだ）、スコティーを押えつけて、すべてを酒の上の冗談に

してしまった。それっきり彼らはそんな悪さは二度とやらなかったが、スコティーの方は町で兄弟に行き会
うといつも必ず、「おれは忘れちゃいけないぞ」というように青い目でじっと見つめた。

ぼくの父はアンガス・パイリーが酔っぱらうのをけしからぬこととして眉をひそめていたが、母は、どん
な人だって、ときには自分のみじめさを忘れたくなるものじゃないだろうかと、いいいいした。もつとも父
が憤慨するのは、せっかく苦勞して手にいれた金を、と思うからだ。それに泥酔することは町に対して
精神的敗北を認めるようなものだ——そう父はいった。しかし何よりも金が消えてなくなることは痛手のは
ずだった。いったいアンガスはそんな金をどこで得たのだろうか？　パイリー夫婦はたいていは無一文で暮ら
していかねばならなかった。二人とも、もちろん自由なオーストラリア人であるはずだが、じつさいに
は借金という主人に縛られた農奴のようなものであった。彼らの場合、その債権者は掛け売りをしてくる
穀物飼料商のドーマン・ウォーカーと食料品店主のフラナガンだった。もつともその掛け売りのお蔭で一家
は生きのびていたようなものだったのだが。パイリー一家は新しい服など買ったためしかなかった。電燈も
なく、石油ランプを使っていた。アンガスはいつも借金で首が回らなかったのも、おかみさんはくる月もく
る月も、炬棚の上に一ペニーの銅貨さえ見出さないことが多かった。彼女が買うわずかな食料品もすべてつ
けだった。彼女はつけで買った粉でパンを焼き、毎週自分たちの分にとりのけておく一、二パイントの牛乳
で少しばかりのバタを作った。

四歳のときにはじめて町にお目見得したスコティーが二度目にセント・ヘレンに姿を見せたのは、ある朝
の八時に学校の門前に父親によって置きざりにされたことだった。そのとき彼は七歳だったが、時間
がきたら自分で学校にはいって行って校長に名乗らなければならなかったのである。学校は九時始まりだっ